へき地・複式教育フォーラムにおいて提起された今後の課題

川　前　あゆみ（北海道教育大学釧路校）
戸　田　竜　也（北海道教育大学釧路校）
髙　嶋　幸　男（北海道教育大学釧路校）

The Subject raised in the Forum about Multi-grade Class Education of rural School

Ayumi KAWAMAE, Tatsuya TODA and Yukio TAKASHIMA

はじめに

本稿では，へき地・複式教育における今後の課題を整理していく。へき地・複式教育に関する最近の先行研究では，長崎大学・鹿児島大学・琉球大学の３大学連携研究における『複式学級指導法―単式学級内の学力差に対応した現場の工夫にも役立つ指導法―』が詳しい(注１)。各教科（国語・算数・社会・理科・図画工作・音楽・体育）による複式授業の特性を詳細にまとめている。また，複式学級の指導方法のあり方や小規模校どうしの遠隔共同学習など，着眼点は多岐にわたり，実践的である。さらに他の先行研究では，玉井康之氏らによるへき地・小規模校の将来的な発展課題について各専門分野からの共同執筆による論が明らかにされている(注２)。そして，北海道教育大学が全学組織の中で長年続けてきた『へき地教育研究』紀要各号にあるように，研究者それぞれの専門的な見地から，へき地・複式教育の到達点と今後の発展課題が述べられている(注３)。

本稿では，前稿の「複式授業をどう指導するか」と題したフォーラムにおけるパネルディスカッション記録に基づき，へき地・複式教育の今後の研究課題を改めて提起していくこととする。観点としては，第一に，複式授業づくりのポイント，第二に，複式授業づくりの考え方で大切にすべきことを中心にまとめ，小規模校における少人数指導や複式授業の検討課題について提起していきたい。

なお，参考までに，シンポジウムの発言要旨とパネリストの発言の要点などをもとに，へき地複式教育（授業）について，複式授業を構想したり，指導上の考えなければならないこと，あるいはその課題について表１としてまとめておいた。参照されたい。

注記：以下の文中にある『』の引用は，本フォーラム参加者による事後アンケートの感想に基づき編集している。

１．複式授業づくりのポイント

(1)　複式学級の様々な人数構成

複式学級の人数構成には様々な形態があり，人数によって指導方法も様々である。例えば，学級内に複数対複数の児童生徒の構成や，複数対少人数（複数・１人），少人数対少人数（１人・１人）という具合である。また，低学年・中学年・高学年によって，学年や発達段階による指導方法が異なってくる。こうした異学年構成の学級形態は，少人数であることのメリットを生かした指導が求められる。また，指導する教師においては，少人数での授業の大変さもある一方で楽しさもあり，例えば，１対１の授業としてすべての授業行為がたった一人の子どものためにあるという楽しさもある。

フォーラム参加者の感想を取り上げてみると，『今日，お話を聞いて一番考えさせられたことは，「少人数」のとらえ方です。自分は今まで二人や三人の学年を「少ない人数だ。何ができるんだろう」とマイナスに考えることがありました。しかし，今日のお話を聞いて，一人では大変だが，二人以上ならいろいろなことができるんだと思いました。（感想：学生）』という参加した学生からの意見があった。また，『今回のパネルディスカッションでもっとも共感したのは，パネリストが述べていた「複数の人が集まって学ぶのが学校である」ということでした。確かに，へき地校では子どもの人数も少なく，複式授業という形をとらざるを得ない状況にあります。しかし，人数は少ないといっても，他者の意見の共有や学びあいは可能だと思います。「一人の考えでクラス全体が大きく前進する」そんな授業を目指して，これからへき地での学びを考えていきたいと思います。（感想：学生）』

表１．複式授業の構想・指導の考え方と工夫および課題

１．複式授業の構想・指導の考え方
①「課題把握」の重要性（学習に意欲を持ち、確実に把握できるような手立てを取ること。） ②間接指導時に、どうやって課題を追求し解決したのか、説明ができるように育てる。 ③学年１名の児童では難しいが、学年で２名以上いれば、考えや意見を交流させるように、力を合わせて学習させるようにする。 ④自力または友達と力を合わせて課題を解決する喜びを持たせるように、日ごろから評価する。 ⑤全員参加の保障（複式・単式にかかわらず、授業を受けている子どもたち全員を参加させるということが、授業成立の条件と考えたい。） ⑥向上の保障（授業の眼目は、学力保障である。学力が向上したという実感を全ての子どもたちに味わわせたい。） ⑦学力と評価と成績（この三語の示す範囲はどのようなものか？　この問いを考えることが、授業で保障すべき学力が見えてくる。）
２．複式授業の指導法に関すること
①複式学級の構成人数と指導方法（・複数－複数　・複数－少数（複数・１人）・少人数－少人数（１人－１人）） ②学年・発達段階による指導方法（・低学年・中学年・高学年の複式授業） ③直接指導の重要性（間接指導時直前の直接指導の指示のあり方） ④間接指導の重要性（習熟・応用だけではなく課題解決場面に） ⑤わたりの注意点（両間接、同時間接の活用、「わたる」時の質問・指示・発問の重要性） ⑥複式・少人数を生かして（複式・少人数メリットを生かした指導を） ⑦基本的な学習指導として（・ワークシートの活用　・学習ルールの確立（学び方を身に付けさせる－つまずいたとき、先生に質問があるとき、はやく終わったとき、見通しがつかないとき－　・話し合い活動のルール　・教科リーダーの育成） ⑧指導内容の軽重を見極め、中学年であれば、本時は３年生に厚く、次時には４年生に厚くというように内容に応じて、直接指導の時間の軽重をつける。 ⑨下学年が学習につまずいたときには、内容に応じて上学年にヒントや手助けをさせる。 ⑩ワークシートでの学習は間接指導時に有効ではあるが、児童の思考をあまりに規定しすぎないようなワークシートを作るようにし、考えることを妨げないようにする。
３．へき地・小規模校における少人数指導・複式授業の課題等
①全校一斉の授業実践（音楽・図工・体育など芸能教科）の可能性。行事への取り組みで育つ責任感。 ②閉鎖性とマンネリ感の恐怖（行事での地域との交流、協力は盛ん。しかし、毎日の授業はかなり閉鎖的。どんな授業をして、どのように子どもたちが学んだか、外部に知られる機会は大変少ない。更に、人間関係の広がりが少ないため、子ども同士の人間関係、相互評価も固定的である。これらを打ち砕き、改革していく必要性。） ③子どもを見る目の質を磨く（子どもをどう見て、どう理解するか？　教師の児童理解力を高めることが授業をより良いものにしていくことに直結する。） ④地域の子どもを育てる視点（子ども理解）。 ⑤特別支援教育における実践研究の蓄積の課題

という参加者の意見から分かるように，少人数指導をどのように積極的にとらえて授業内容や，授業方法に反映させるかが課題となる。

⑵　直接指導と間接指導の重要性

直接指導の重要性については，間接指導に入る直前の教師の指示のあり方がその授業のすべてを左右するほど大変重要である。複式授業では，指導内容の軽重を見極め，中学年であれば，本時は３年生に直接指導を厚く，次時には４年生に直接指導を厚くというように内容に応じて，直接指導の時間の軽重をつける。

他方，間接指導の重要性については，習熟・応用の場面だけではなく，子どもが取り組む課題解決の学習場面で主体的に対応していけるように子どもを指導していくことが重要となる。また，間接指導時に，どうやって課題を追求し，解決したのか，子どもが自分の言葉で説明できるように育てることも大切である。直接指導と間接指導を渡り歩く教師の「わたり」の注意点としては，両間接，同時間接の活用が求められる。

フォーラム参加者の感想を取り上げてみると，『間接指導の多い複式授業では，その時間を充実させるかさせないかで，子どもたちの学びに差がでるのではないかと思っています。間接指導直前の指示とともに「授業のルール」は，間接指導を充実させるために重要だと感じました。（感想：学生）』，『多くの先生方から多様な意見を聞くことができ，大変勉強になりました。複式校だから○○，単式だから▲▲，という「マニュアル」はないんだということに気づかされました。直接指導の際，どう子どもたちから意見を引き出すのか。間接指導の際，教師が見ていない時間をどうするのか。考えさせられる場面が多くありました。（感想：学生）』といったように，教師の指導についての意見が多くあげられた。

つまり，教師の子どもへの指示の仕方，間接指導時に子どもが何をしているかを把握できる指導のあり方，子ども自身が間接指導時に何をしなければならないのか主体的に考えられる指導などである。

(3) 複式授業の基本的な学習指導の観点

複式授業では，基本的な学習指導として以下の観点がある。間接指導の際に子どもが１人で学習できるワークシートの活用がある。このとき留意することは，ワークシートでの学習は，間接指導時に有効ではあるが，児童の思考を必要以上に規定しすぎないワークシートを作るようにし，考えることを妨げないような工夫が必要である。教師が他学年の指導をしている時に１人でも主体的に学べる学習ルールの確立（学び方を身に付けさせる）がある。例えば，間接指導時に子どもが学習につまずいたとき，先生に質問があるとき，早く終わったときに子どもたち自身が自分で次の行動を考えられる指導をすることが求められる。また，子ども自身に見通しがつかないときにどうするか，話し合い活動のルールは何かを考えることができるようにさせる。子どもに教科学習のリーダー役を務めさせたり，下学年が学習につまずいたときに内容に応じて上学年にヒントや手助けをさせる。そうすることによって，子ども自身が思考を整理して物事を順序立てて説明できる能力を培うことが可能となる。周囲の学習状況を判断し，子どもなりに適切な判断をする力を養う機会となり得る。

さらに，教室環境を変化させることも有効である。例えば，移動黒板の使い方を工夫するだけでも授業の雰囲気や展開が変わってくる。そして，子どもにノートづくりをさせることの大切さが観点としてあげられる。それは，間接指導時に，子ども自身がこれまでの学習内容を自分で確認することができるためである。

フォーラム参加者の感想には，『以前から複式授業は，２学年分の授業を１時間でしなければならないので，教師も大変だし，児童も学べるものが半減してしまうのではないかと思っていました。今日のパネルディスカッションでは複式授業でも，子どもの学び場であるということに変わりはないことをあらためて感じさせられました。小さい学校であろうと大きい学校であろうと，子どもたちが考えていく場を提供していくのが教師なんだと気づかされました。（感想：学生）』，『自分も複式学級を担当しており，悩みや不安を解決したり，共感できました。子どもたちへの課題の提示の仕方，課題を終えた子どもへの対応など，具体的事例を聞くことができ，今後の活動に役立てていきたいと思います。（感想：教員）』という意見が見られた。

２．複式授業づくりの考え方で大切にすべきこと

(1) 授業の閉鎖性と全員参加の保障

へき地・小規模校では，様々な行事において地域との交流，協力が盛んである。しかし，毎日の授業はかなり閉鎖的である。どんな授業をして，どのように子どもたちが学んだか，外部に知られる機会は大変少ない。さらに，人間関係の広がりが少ないため，子どもどうしの人間関係，相互評価も固定的である。これらを打ち砕き，改革していく必要性がある。複式・単式にかかわらず，授業を受けている子どもたち全員を参加させるということが，授業成立の条件と考えたい。

フォーラム参加者の感想には，『少人数の場合，差が目に見えやすいと思うのですが，その差をうめる，なくすことは必要なのでしょうか。それを個性と見て，よいところだけのばすのか。人数が多いと平均にならしやすいし，学習も学びやすいと思う。小規模で３人の児童がいて１人がズバぬけて理解が早いと，リーダーとして学び合いの中心，授業の中心になっていくと思うけれど，それだとその子に負担がかかりすぎてあまり良くないと思った。差は差として認め，底上げしていくことが大切ではないか。上の子は停滞してしまいそうだと考える。うまくやることが必要なのでしょうね。子どもの発達速度，伸び幅をつかみ，それに応じての指導が大切ですね。（感想：教員）』という意見が出された。

(2) 指導過程における「課題把握」の重要性

「課題把握」がとにかく重要で，学習に意欲を持ち，確実に把握できるような手立てを取ることが教師には特に求められる。指導過程の「課題把握」（直接指導）時に，「課題解決」までの見通しを児童に持たせて「間接指導」に入る。子どもたちが自分で理解していくストーリーを構築できる力をつけさせる。子どもたちが考えていける環境をつくる。つまり複数いれば，話し合いができる，協力ができるということである。学年１名の児童では難しいが，学年で２名以上いれば，考えや意見を交流させるように，力を合わせて学習させるようにする。自力でまたは友達と力を合わせて課題を解決する喜びを持たせるように，日頃から評価する。

フォーラム参加者の感想に，『学力と人格形成のつながりや，楽しい授業と作業・体験学習や総合的な学習など，一人ひとりの児童生徒が大切にされる教育について，検討を深めていきたい。（感想：大学教員）』といった意見があった。このように，小規模校における少人数指導の中で子どもの人間的な成長と学力の向上をどのように図ることができるのか，その可能性を探ることが今後の課題となる。

⑶　子どもを見る目の質を磨く

子どもをどう見てどう理解するか，教師の児童理解力を高めることが授業をより良いものにしていくことに直結する。たった１人の子どもとの授業（教師の発問・子どもの意見の引き出す・友だちづくり），運動ができない子ども（縄跳び・跳び箱・自転車乗り）と出会ったときにどのような対応を講じることができるのかである。

さらに，学校外に目を向けると，へき地校での地域環境を意識した子どもの育ちを教師がどのように理解するのか，子どもが成長していく際に何が課題となり，どのような支援・指導が必要なのかを常に考えていくことが重要である。

３．複式授業の今後の可能性

以上，本稿では，複式授業づくりのポイントと複式授業づくりを考える際の大切にすべきことを中心にとらえてきた。そもそも複式の授業は，不自然な授業である。それは，共に学ぶべき教室内の子どもたちが異なった学習を展開しなければならないからである。そのため教師が抱える悩みや失敗も多いと言われている。しかし，複式授業ゆえの限界と，だからこその可能性を明示する必要性があった。

今後の課題としては，第一に，複式授業や小規模校という枠組みにおいて学年を超えた関係性や共同性はいかに構築できるのか，である。その１点目には，複式授業の指導方法を発展的に開発していくことである。２点目には，複式授業のほかにも，小規模校における合同学習や集合学習などを取り入れた少人数指導の特性の積極的な活用が求められる。３点目には，全校一斉の授業実践がある。小規模校では，音楽・図工・体育など，芸能教科を集団的に全校一斉に行うことが有用であることが多い。また，学校行事などに全校一斉が取り組むことで子どもの責任感も育ち，大規模校にはできない指導であることから，様々な可能性を試すことも今後の検証課題となる。

第二に，これからのへき地・小規模校のあり方にはどのようなことが考えられるか，である。へき地に暮らす子どもを育てるということは，地域の子どもが地域の子どもとして育つという指導が教師に求められることを意味している。将来的には他の地域で人と関わるための他者との関わり方や社会性，共同性を培うためのどうしても必要な指導である。へき地での指導は授業だけではなく，地域課題も含めた視野を持つことが教師には特に求められている。単なる授業技術だけではなく，子どもを地域の子どもとして育てていく指導のあり方を模索し，実践できる教師の育成が必要となっている。フォーラム参加者の感想には，『基本的なへき地・複式の方法論がまとまっていない現段階では，一定の方法論を若い教師に提示できるものを作っていく必要がある。今日は，個々の教員の方法論から，たくさん普遍化できる教訓が出てきた。例えば，直接指導から間接指導への入り方（指示の仕方），協同学習の進め方，個の関心の取り上げ方など，指導方法の教訓例をつくれないか。（感想：大学教員）』という意見が出された。複式学級を担任することが中堅層になって初めて経験する教師も少なからずいる。少子化と学校統廃合が進む中で，複式授業の指導方法を継承していく研究も不可欠となっている。

さらに，近年の全国学力テスト結果から，へき地の学力が都市部に比べて相対的に低いことが一部で指摘されているが，へき地・小規模校の子どもたちの学力向上を目指すにはどのような方策が可能なのかを念頭に研究開発していく必要が求められている。

そして最後に，フォーラム全体を通して参加者から出された意見には，複式学級に対する意見の中には，単式学級にも活用できるものがあるという意見や，学校は集団的な学びの場であるという意見もあった。このような意見は，学校規模を問わず，子どもの人数にかかわらず，子どもの学びの場である授業をより良いものにしていく，子どもにとって居心地の良い楽しい学校づくりを目指す普遍的な課題とも言える。今後は，これまで述べてきたフォーラムで提起された課題に基づきながら，複式授業の指導方法，へき地・小規模校のあり方についての発展的な可能性を学校現場との実践的な研究交流を通して探究していきたい。

おわりに

さて，今回のシンポジウムで取り上げられなかったものに少人数・複式授業における教材研究に関わることや特別支援教育に関わることがある。前者については，本フォーラムの前段で行われた学生による公開複式模擬授業について，パネリスト，コメンテーター，フロアーからいくつかの発言があったが充分な議論にはならなかった。少人数授業，複式授業での指導というと「授業のやり方・方法」ということに注視されがちだが，もっと多くの場で具体的なテーマ・課題を取り上げ，内容論を含めた教材研究について議論し，深める機会を持つべきだろう。ここでは，教材の内容や教具に関わる研究の課題の存在も確認しておきたい。

次に，後者の特別支援教育についてであるが，2007年度から特別支援教育が始まり，通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童・生徒に対して，そのニーズに即した教育を実施することになったが，釧路・

根室管内の特別支援学級の設置率は，全国平均より10％程度上回っており，この地域でのニーズの高さがうかがえる。学校外の専門機関が限られ，マンパワーにも制約を受けるへき地・小規模校において，個々の具体的なニーズに応え，地域・学校の特性を生かした教育・授業実践を展開していくためには,学校内外の協働とともに,さらなる実践研究の蓄積の課題があることを確認しておきたい。

なお，フォーラムの様子については，本研究紀要の１頁～22頁を参照されたい。

【注】

注１　長崎大学・鹿児島大学・琉球大学の３大学連携研究「複式学級指導法」編集委員会編『複式学級指導法―単式学級内の学力差に対応した現場の工夫にも役立つ指導法―』東京教学社，2009年.

注２　玉井康之編『子どもと地域の未来をひらく　へき地・小規模校の可能性』教育新聞社，2006年.

注３　へき地・複式教育に関係する理論研究，実践研究については，北海道教育大学　学校・地域教育研究支援センターへき地教育研究支援部門が毎年刊行している研究紀要『へき地教育研究』各号に詳しい。

【参考文献】

・全国へき地教育研究連盟編『へき地・複式・小規模学校Ｑ＆Ａ』2000年.
・北海道立教育研究所・北海道教育大学編『複式学級における学習指導の在り方-はじめて複式学級を担任する先生へ』2001年.
・北海道立教育研究所・北海道教育大学編『複式学級における学習指導の在り方-学年別指導の実践事例』2003年.
・玉井康之編『子どもと地域の未来をひらく　へき地・小規模校の可能性』教育新聞社，2006年.
・長崎大学・鹿児島大学・琉球大学の３大学連携研究「複式学級指導法」編集委員会編『複式学級指導法―単式学級内の学力差に対応した現場の工夫にも役立つ指導法―』東京教学社，2009年.